

「稻作図彫刻に見る農民の篤き思い」 「瓦谷上町内の天棚」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



写真上／第3面 代かき 写真下／第5面 田植え

天棚とは、天念仏とか天祭と呼ばれる行事に用いられる施設である。仮設組み立て式の二階建てで、屋台同様に彫刻で飾り立てたものであるが、車はなく固定式のものである。

天念仏は、日天・月天等に風雨順調・稻作の無事・豊穰等を祈願する行事で、北関東か

ら福島県南部の地域に見られ、とりわけ栃木県が多い。中でも宇都宮を中心とする県央地域には、天棚を用いた所が多く、宇都宮市内だけでも六十ヶ所基が存在する。

天棚は、彫刻屋台と同様前面、両脇を彫刻で飾り立てた

絢爛豪華な造りとなっている。

屋台や天棚の彫刻の題材は、牡丹や菊、葡萄、

小鳥、リス、龍等が一

般的である。ところが、

瓦谷上町内の天棚には、

一階欄間の前面および両脇の七面に、種まきから脱穀収納までの一連の稻作の彫刻が見られる。

稻作の様子について詳しく述べよう。第一

面は、「馬に犁をつけて

の田起こし・鍬での畔塗り」、第二面は、「水桶による苗代搔き・種まき」、第四面は、「苗取

り、馬鍬による本田の代搔き」、第五面は、「苗運びと苗配り・早乙女による田植・ヤカンを手に提げ、ご馳走が入った背負い籠を背負い食事の準備をする女」、第六面は、「田の草取り・稻刈り・馬の背についての稻運び」、第七面は、「千齒抜きでの稻扱き・唐竿による穗打ち（脱穀）・唐箕による稻粉の選別・土磨白での粉磨り・俵詰め・蔵への収納」である。

この天棚の製作年、彫刻の製作者は不明であるが、天棚を格納する小屋の上棟年が文久三（一八六三年）とあるので、製作年もその頃と推定される。彫物師については、羽黒山頂上にある天保十二（一八四〇）年再建の密嶽神社の稻作農耕図彫刻を手掛けた鹿沼市久我の神山政五郎（一八〇八—九二）、あるいは江戸末期中里図彫刻を手掛けた高田伊左衛門（一八一〇—九二）である。

天棚の名前は、当地の農作業の様子を熟知した在地の彫刻師であることは

間違いない。というのも犁や馬鍬、千齒抜き、唐箕、土磨白等当時使用されていた農具、水桶への種粉浸し・浸した種粉のムシロ上での芽出しといった農法、股引をはかず長着を尻はしようた衣装、ヤカンを手に、ご馳走が入った背負い籠を背負い食事の準備をする田植時の食事の風習等、江戸末期の宇都宮近辺の稻作の様子が詳細に彫刻されているからである。

これら一連の稻作図彫刻について、瓦谷上町内には、ある農家の庭先に彫刻師を招き、その眼前で農作業の真似事を行ない、それに基づいて彫刻をしてもらつたとの言い伝えがある。その真偽はいずれにせよ、一連の彫刻は、村人の依頼によつてなされたものと思われる。背景には、村人たちの稻作に対する篤き願いと、稻作にかけた自分たちの証を後世に残したいとの思いがあつたに違ひない。そうした瓦谷上町内の人々の願い、思いを表す所として、毎年盆の時期三日三晩村中の人々が集まって行われる天念仏の中心施設である天棚は、一番効果的で相応しい場所と考えられたのであろう。

なお、この稻作図彫刻は、上河内民俗資料館で展示中である。